画 集

道

第 一 卷

は じ め に

平成 17 年の秋より始めた絵描きも、毎日続けており、作品もだいぶ溜まった。
最初は何のことはない〝カウンセラーの勧め〟で始めるうちに病み付きになり、画材の心まで少しは分かるようになってきた。物にはみな〝心〟がある。それを見つめ伝えたいと思いだした。私は病で声を無くし余計に〝心〟の会話が響いてくる。かすかな声で響いてくる言葉は〝心〟だ。この冊子は、私にとって生きた証でもあり、大切にしたい。是非次号もお楽しみに。
終わりに、この本の編集と出版にあたり原画の汚れや余分な線を取り除いて画像処理してくれた義兄に感謝するとともに、係りを決めて丁寧に仕事を進めてくれた家族とご協力頂いた方々に感謝する。

画 集

道

第 一 巻

二輪草
2005年4月作

くさばな

野山によく散歩に行き、目にした草花は自然でいい。自然にのびのび育っているのは良い。人知れず自由に好きなところで咲く。好きな場所で好きなときに。この自由さこそ大切。恩師が「折れたるままにコスモスの咲く」と詠ったように。

左上：ほうずき　2005 年 10 月作
右下：とうがらし　2005 年　9 月作

秋の赤い実は
大好きよ

左上　：バラ　2005 年　9 月作
中央下：胡蝶蘭の葉　2005 年 10 月作
右　　：彼岸の仏花　2005 年　9 月作

コスモス

娘は帰りが遅い。近くの恩田川の渕から手折ってきたのがこのコスモスである。病の母の為に採ってきてくれた。暗い部屋を少しでも明るくするために。その可憐な想いを汲んで可憐な花に仕上げたつもりだが。

2006年10月作

左：ススキ　2005 年 10 月作
右：木の実　2005 年 9 月作

左：とうきび（とうもろこし）2005 年 10 月作
右：柿の葉　2005 年 11 月作

自然の色はいいな。
きいろや紫
いろいろ採って来て。

リース

カラス瓜のリース

リースの枠は近くの子供の国のマラソンコースで、夫と散歩しながら作ったもの。四季を通じて色々なドライフラワーがあるが、秋の“カラス瓜”が一番楽しみ。赤い瓜を際立たせて描いたつもり。

2005年11月作

寒いのに、いろんな花や実をつけて
頑張ってるわね。

ピンクのカクタス　2005 年 12 月作

左：南天　　2005 年 12 月作
右：シクラメン　2005 年　1 月作

左：紅梅　　2006 年 2 月作
右：セント・ポーリア　2006 年 1 月作

春は花ざかり
うれしいな

左上　：バラ　　2006 年 2 月作
中央下：デンファレ　2006 年 3 月作
右　　：沈丁花　　2006 年 3 月作

菊

近所に住む同僚だが、いつも見舞ってくれ、又自然にも興味があって四季の珍しいものをよく届けてくれる。この菊もそのひとつで、花火のような花弁が珍しい。はじめて見たものを直ぐに絵にするのは気が引けたが、とにかく描いてみた。また、短歌にも詠んだ。

2005年11月作

左上　：鈴木さんの花　2006年4月作
中央上：あやめ　2006年5月作
中央下：あまどころ　2006年4月作
右　　：君子蘭　2006年5月作

スミレさん
いつも玄関先を賑わせてくれ
ありがとう

三色スミレ
2006 年 4 月作

左　：　エビネラン　　2006 年 4 月作
左下：　切花(母の日)　　2006 年 5 月作
右　：　ドライフラワー　2006 年 5 月作

ぐいのみ
2006 年 2 月作

やきもの

私も元気だった頃は色々な展覧会や窯元によく出かけた。詳しくはないが、好きな方である。焼き物のよさはその暖かさと風合いにある。抹茶茶碗もよいが、ありふれた皿も良い。とにかく日常使うものがよい。飾っておくものではない。

ガラスの醤油さし

ガラスの透明感は水彩に限る。びっくりするほどよく表現できる。これは九州土産にもらったもの。なかなか洒落た形をしているが実は醤油ビン。会社の友達にもらう。

2006年2月作

左上：萩焼　2006年3月作
左上：有田焼壺　2006年3月作
右　：一輪挿し（自作）2005年6月作

左　：有田焼茶筒　　2006 年 3 月作
上　：コーヒーカップ　2006 年 2 月作
右下：コーヒーカップ　2006 年 6 月作

左　：茶器セット　　2006 年12月作
右上：水さし　　2006 年 3 月作
右下：コーヒーカップ　2006 年12月作

毎日見てても、よーくみると
新しい発見ってあるのよね。
それとも私の心変わりかしら。

左：有田焼ミニチュアセット 2006 年 5 月作

左上：コーヒーカップ 2005 年 12 月作
中央：リモージュ焼き 2006 年 1 月作
右上：冷酒ビン 2006 年 2 月作

一輪挿しの花瓶

結婚祝いに従兄にもらったもの。上野焼あたりであろうか。どんな花でもよくあうので重宝している。釉薬の感じがうまく表現できるか心配したが、水彩を何度も重ねることによって上手くいくことを知る。私も気に入っている作品のひとつ。

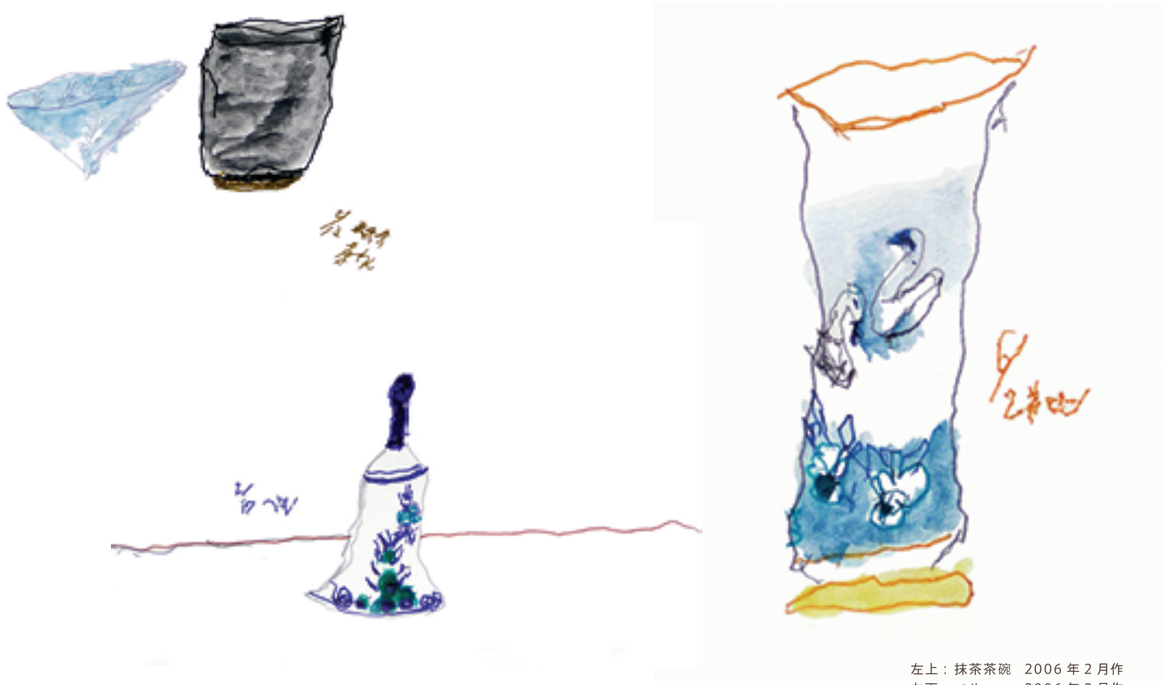
2006年5月作

左　：香炉　　2006 年 1 月作
右下：有田焼壺　　2006 年 3 月作
右上：コーヒーカップ 2006 年 2 月作

九谷焼のポット

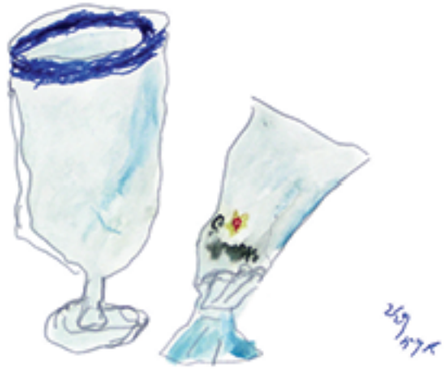
九谷焼のポットは母が骨董品屋で見つけてきたもの。長いこと実家にあったものを貰った。この焼き物は絵柄が細かく複雑で描くのは難しいが、何とか画材の持ち味を引き出すよう頑張った。原画は額に入れて母に贈呈した。

2006 年 2 月作



左上：抹茶茶碗　2006 年 2 月作
左下：ベル　　2006 年 2 月作
右：　花瓶　　2005 年 6 月作

左上　：茶碗　　2005 年 10 月作
中央下：抹茶セット　2005 年 12 月作
右上　：グラス　　2006 年　1 月作



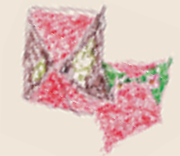
斜めのグラス

スイスの旅で“氷河特急”の食堂車で求めたもの。車窓に見えるアルプスの景色や石の鉄道橋の記憶と重なる。ガラスは水彩が一番ふさわしい。斜めのグラスは、急勾配でも中のワインがこぼれないような配慮。

2006年2月作

左上　：抹茶セット　2006年2月作
中央下：茶器セット　2006年2月作
右上　：花瓶（備前焼）2006年6月作

張り子のトラ
2006 年 4 月作



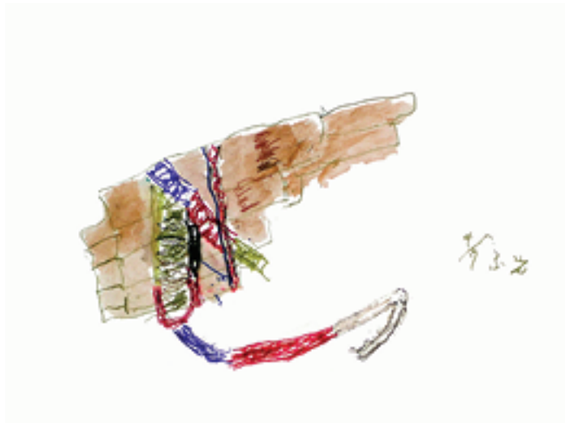
おきもの

あちらこちらに散らばっているように見えて、置物には決まった場所がある。ここにはこれという場所があり、違っていると落ち着かない。そこになければならない。物には定まったところがあるということだろう。

戌の置物

戌年に因んで旧友が送ってくれたもの。かわいさが決め手である。小さく可愛らしくどこまで描けるか分からないが挑んでみた。この旧友というのが小学校から一緒に通っていたのだから長い付き合いである。小さな戌は見舞いの品。

2005 年 12 月作



左　　：笛　　2006 年 4 月作
中央下：笛(南米土産)　2006 年 6 月作
右　　：片目のだるま　2006 年 1 月作

左：タイのおめん　2006 年 5 月作
右：エジプト土産　2005 年 11 月作

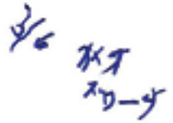
左上　：バイソン　　2006 年 3 月作
中央下：かたつむり　2006 年 4 月作
右下　：コーヒーミル 2006 年 2 月作

リヤドロの母子像

この年になってもまだ祝いの品が届く。これは誕生祝に母が送ってくれたものである。母親の本を読む姿をどう優しそうに描くか苦労した。人間の“目”は難しい。優しくも怖くもなり、目ひとつで全てが決まる。顔の中心に在る訳だ。

2005年11月作

右上　：かも　　2005 年 10 月作
左下　：オランダの人形　2006 年　3 月作
中央　：ミルク壺　　2006 年　4 月作
右　　：犬　　2005 年 12 月作



描かれてるほうも
いい顔になるのよ。

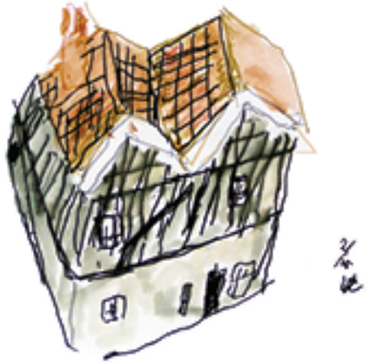
左：カメオ　　2006 年 3 月作
右：後姿の少女　2006 年 5 月作

天女の像

木彫の像。天女の衣をどれだけ優美に描けるかがミソ。木の感じを出すのにもっとも苦労した。この送り主が大学生だった頃、日本語を学ぶイギリスの留学生として我が家にホームステイしていた。香港の人であるが、今はバンコクに住んでおり愛子のよき友。世の中狭いものだ。

2006年2月作

左上　：花瓶　2006年1月作
中央下：タラバガニ　2006年1月作
右　　：ふくろうの置き物　2006年3月作



左上　：象　2006 年 2 月作
中央下：ふくろう　2006 年 2 月作
右上　：イギリスの家の置き物　2006 年 2 月作

左上　：博多人形　2006 年 3 月作
中央下：博多人形　2006 年 3 月作
右上　：アライグマ　2006 年 3 月作

雉

雉の剥製は、夫の退職祝い。生きているような羽の色。この鮮やかさをどう表わすかが腕の見せどころ。翼を広げた姿を想像してみる。実物には及ばないが、一応私なりに描いてみた。初期の作品だが気に入っている。雉は今も床の間を飾っている。

2005年10月作

おわりに

この本の出来上がるまでの背景について、夫の目から見た感想を一筆付け加えさせて頂きます。

妻（啓子）が数万人に一人の確率で発症するといわれる特定難病の“多系統萎縮症”に遭遇して丸三年余が過ぎました。小脳の細胞が萎縮して運動機能や自律神経系統の機能が次第に侵される病で、今では四肢のうち僅かに右手が多少動くだけで、発声機能も失いつつあります。治療方法も無く正に“真綿で絞められる”の言葉がぴったりのむごい病で、当初は精神的な打撃と発狂せんばかりの自律神経系統の不調に心身ともに絶望の淵を彷徨う毎日でした。５０代半ばのまだまだこれからという年で突然の病に臥し、運命の悪戯にしてもあまりに残酷な現実と言わざるを得ません。その中にあって、病と真正面から向き合って再び本当の“自分”を取り戻し、自らも又周囲にも安らぎを与えてくれるに至った妻の不屈の精神力と優しさに、あらためて敬意を表します。“絵”はその力の一助となるツールと言えるでしょう。

３年目に入った時期で、何か心の支えになる“カウンセリング”を探していたところ、ケアマネージャーの瀬川さんのご紹介で、原田さんにお会いして心のケアーを目的に始めたのが“絵描き”の始まりでした。既に２年目から“刺し子”を始めていて、ヘルパーさんやよく訪ねてくれる友達に差し上げるのを楽しみにしていましたが、“絵描き”は、字もろくに書けなくなった右手のリハビリのつもりで始めたのが、いつの間にか楽しみの日課となり今に至っています。やろうと決めたらすごい迫力で取り組む“性質”なので“毎日一作”のペースでもう1年間続けております。ごく最近は、右手の動きが更に悪くなって、思うように筆が進まなくなって来ましたが、それでも絵描きの時間は目が輝いています。１年も経つと画材も底を突き、その日の画材を何にするか毎日あれこれと思案するのも楽しいようです（収集に走る私は堪りませんが・・・）。時には自ら花屋に行って（もちろん家族の全面介助が必要で、専用車とリクライニング車椅子に乗って出かける）気に入ったものを買ったりもします。描いた絵は娘が作った専用のホームページにも掲載しておりますが、皆様から色彩が綺麗で面白い絵がたくさんあるね・・と言われ娘達の発案で冊子に纏める事にしました。既に３０ページのスケッチブック１２冊に達した原画は、不自由な手で描いているため汚れや描き損じも多く、私の兄の協力を得てデジカメに撮って一部画像処理してもらいました。冊子の編集と製作はバンコク在住の娘が中心になって取り進めました。

日ごろお世話になっている多くの方々、たくさんの友人・知人に囲まれて、妻もこのような状況にありながらしっかりと“今”を楽しみ充実させています。皆様の暖かいご支援に心より感謝申し上げるとともに、是非この先も応援よろしくお願いします。

夫（友彦）より

作 者 略 歴

吉川 啓子（きっかわ けいこ）

福岡県生まれ、横浜市在住

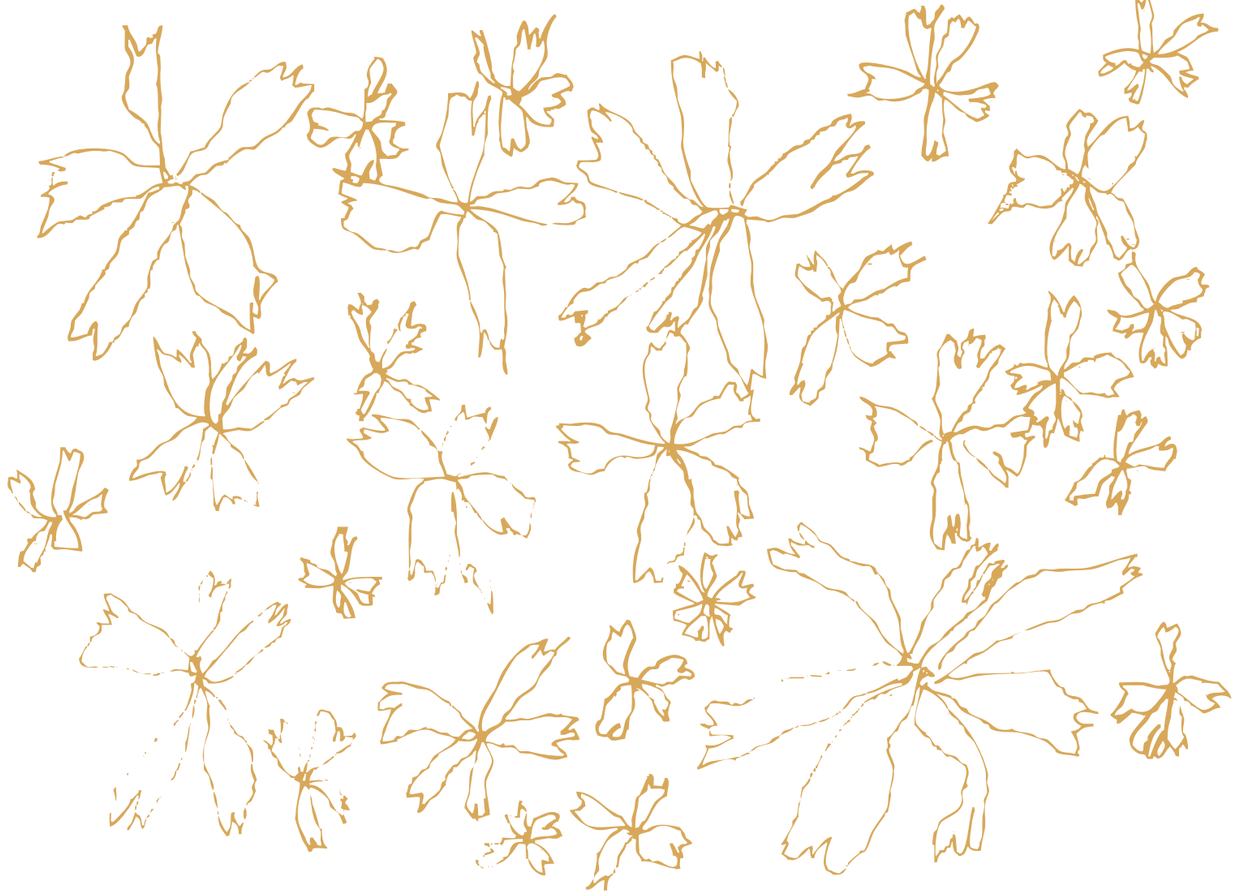
23年間横浜市で教諭(国語・特殊教育)として勤めるかたわら、書、朗読、和太鼓などの趣味の域をを超えた活動を行う。
書は2段で雅号は“祥苑”。本書のタイトル“道”は自筆のもの。朗読の会“ひととき”の会員として活動した。
2005 年春より短歌集「いのちの重さ」を４巻発行した。ホームページ(http://home.a01.itscom.net/kikkawa)で絵、短歌、刺し子等を紹介中。

2003 年春に、オリーブ橋小脳萎縮症 （英語名：Olivopontocerebellar atrophy)と 診断され、自宅で療養を続ける。現在は歩行が不可能となり、車椅子とベットの生活。難病とされ、身体機能が序々に衰えるこの病気と闘いながらも、規則的で創造的な生活を目標にしている。

家族は夫と娘二人

ホームページ「いのちの重さ」
http://home.a01.itscom.net/kikkawa

道（みち）- 第一巻

平成 18 年 10 月 1 日　初版第1刷発行
[著者]　吉川 啓子
[発行人・編集]　吉川 友彦、愛子、美奈子
〒227-0035　横浜市青葉区すみよし台 35-9
[デザイン]　大岡 たかえ（ricebowldesign）
[印刷・製本]　J.C.C. Printing Co., Ltd.
Printed in Thailand

© 2006 Keiko Kikkawa All rights reserved
本書の内容を無断で転記、記載することは禁じます。